

Title	就職難論
Sub Title	
Author	前田, 隆吉
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.7 (1914. 9) ,p.892(112)- 907(127)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140910-0112

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

就職難論

前田 隆吉

第一節 就職難問題の發生と研究の必要
筆を現代就職問題に著けんとして心頭浮出する所のもの先づ吾問題の由来を思ふ

抑も社會の未だ幼稚なりし時代にありては社會問題なるものは存在せず譬へ存在すると雖も而も自己一身を以て解決し敢て他人に累を及す事なくして経過せり然るに文運増進と共に社會問題は益々多數となり其質益々重大となり到底個人の努力によりて如何とも爲す能はず茲に社會問題として認識せられ世論を勃興せしむ吾か論せんとする本問題は則ち之なり

由來吾國學者識者決して少數ならず然るに本問題にして研究せられずして今日に至れるは抑も何に由因するか蓋し吾國は文明國の一なりと

は云へ新進たるは免れず學者識者舉て西洋文明の吸収に急にして未だ全く同化域に達せず社會問題として研究せらるゝものは泰西と歩調を共にし資本論に非れば勞働問題なり則ち富豪階級に非れば貧民階級にして滔々として中流階級を閑却して顧みざるの傾向あらざるなきか

然り然りと雖も中流階級の重要なるは歴史の明示する所敢て喋々を要せざるものありとは云へ其社會に於ける勢力を一瞥せよ個人としては大資本家に及はずとも民衆に於て多數なるものあり下流階級の如く多數なるもの非すとは云へ尙財力に於て優れるものあり夫れ經濟上に於ては社會の中堅となりて國運を左右し精神界學界にありては其王者として一國の思想を支配す實に其重要たるや到底他二階級の能くする所にあらず而も他二階級の争闘は常に中流階級の調和する所なり實に中流階級の重大任務を有する所なり

中流階級は斯く重大の責を有す之れ實に經濟上精神上の兩權力を具備するに因る、されば此の階級にして益々多きを加へんか社會は益々良好に進み其地位を高むるや必せり果して然らば新に此階級に入らんとする候補者は如何なる者ぞ且如何なる途を探るべきか則ち二途あり、一は經濟上よりする者、他は精神上、智能上よりする者之なり前者は則ち小僧手代番頭の成上りにして後者は高等教育を受けて世に出てんとする者之なり而して兩者にして順境に中流階級として存在を全ふせば何等社會問題の發生を見る事なしと雖も若し逆境に遭遇し中流階級として存在する能はざるに至らんか先づ前者は其舊職に復して沈黙己か技倆の足らざりしを嘆すべしと雖も後者に至つては其原因を社會に有りとし不平不満を起し滔々として就職難を惹起して中流階級の重任を完ふせざるのみか却つて社會組織を攪亂破壊するの原動力と成るに至らざるか

此點に於て我國の學者の説無きにあらず戸田博士は曰く近來吾國の教育ある階級の生活難か年々甚たしきを加ふるは事實なり不健全思想就中社會主義的思想を生ずる最大原因にして我國に於て眞個の社會問題は未だ泰西の如く勞働問題にあらずして學校卒業者の問題なり此の問題にして解決せられざらんか如何に政府か注意を致すも又如何に學者か社會主義の妄を辯するも不健全思想は其防止全く不可能なりと

吾輩は思ふ就職難の壓迫及其思潮の遙動は已に存在する所吾輩衷心より社會政策家識者に檄して其救済を囑望すると共に又自ら之に當り大に其研究を披瀝せんと欲する所なり

第二節 現代學者識者の本問題に對する見界

吾等前節に於て就職難問題の怖るべき事を述べたり今や此の問題に關して漸く世論の沸騰を見んとする形成にある時吾か學者識者の意見果

して如何

抑も此等論者を分ちて樂觀論者悲觀論者と爲す此の兩者互に其主張を全然異にして共に下らざるを見る時如何に其問題に對する世論の渾沌たるかを知るべし

先悲觀論者の言を聞け代議士尾崎行雄氏は曰く凡そ高等教育を受けたる人々は申すに及ばず僅か中學卒業生と雖も今日の流弊として多く官吏又は會社員となりて行政的事務を執る事即ち俸給生活をなさんと希望し獨立事業を營まんとする者極めて少なし況んや體力を勞して勞務を執らんとする者に至つては皆無と云ふべし即ち生産的の事業に従事する者なく消費者側に立たんとする人のみなり斯くして生産的の人口は學問に従業者の増加すると反比例に減少し他人の生産物資を消費して生活なさんとする人々々々増加一方なり而して此者職を得れば間接に生産的の結果を生ずるも而も社會には職を求むる者多く得

る者少なく千人求めて百人之に就く將來に於ては益々慘酷なるものあらん而も其結果は他人を煽動して社會に風波を卷起し其風波に座して無理にも職を得んとす即ち火事場泥棒の行動を企て擾亂尙之を辭せずと云ふ破壊的人物の増加を來し國家は非常なる迷惑を感じるに至る云々同氏『學問と生活』更に實業界に於ける諸名氏の言を聞くに現代青年の就職難は年々歳々多數の卒業生を社會に供給したるの結果卒業生を容したる結果卒業生の價值甚た下落したるに基因するものにして而も之等青年の實務に迂遠無能は更に之を甚たしくなせり(教育新聞五十一號加藤政之助氏談)

一方に於て此の如く悲觀論の勢力甚たしきもある時翻て他方樂觀論者の見界果して如何、吾鎌田塾長は曰く「凡そ就職難なるものは決して今日に始まれるものにあらず昔より存在した

る問題にして昔にありては百人求めて三十人の未就職者存在したるもの現今にありては千人求めて三百人得ざるものにして其割合に於ては何等變る所無し而も現今就職方面の範圍擴張し多數の高等教育ある者を要す就職難の聲の如き何等驚くの要無し」(第五十二卷産業)

更に桑木嚴翼博士は其著『現代の價值』に於て論じて曰く「元來高等遊民は年々増加するは事實なり然れ共職を得ざるに依て直に不平を起し制度を呪ふ様には成らず成程之等遊民は直に自己の志せる業務に就くを得ざるも第二の職業を選ぶを得て實際に於ては論者の言は杞憂に過ぎず更に高等遊民が資産家なれば憂ふるに足らぬ又多少自己の勞力に依て衣食せざるべからざる者ありとも此者直に社會制度を呪ふと論ずるは初より教育の智識は品性を劣悪ならしむることの前提によるものにして其人自身にとりては甚た不幸なるやも知れすと云へ之に依て直に社會

制度を呪ふとするは餘り速断なり若し夫れ學問か聊かにても品性の修養の一端となる以上は智識を得るに依て世を怨み人を嫉む様な未熟の心意は無き等なり一社會一國家の文明程度は此遊民の多寡に依て下せらるゝものにして此者多き社會は智識の水平線高き國にして英佛獨等の如きは遊民の特に多きを數ふ而して此等の人々か學海の保護者となり好事者となりて且文化の重鎮となりて社會は益々發達す依て高等遊民は多々辯すべきなり」

夫れ以上の悲觀論樂觀論等は共に當代一流の識者學者の述ふる所にして共に理論整然何等缺點無きものゝ如し此に於てか吾人は大に惑ふ所其孰れか眞實なるか此點に於て兩論の是非を批判せんと欲す

先悲觀論より批判せんとして先つ彼等の論據を見よ、一、餘りに高等教育は普及せり、二、毎年卒業すべき數千の學生を收容すべき餘地は

殆ど無し
是等論據の第一を見よ果して彼等か稱ふる如く高等教育は普及せしや今卅回日本統計年鑑に依り學校に通學しつゝある學生及通學し得へき人員を比較するに

通學し得へき年齢にある人口	在學々生	人口百人中在學數
尋常小學 三、三六、〇七九 (六歳ヨリ)	三、二七、三三七	九、九
高等小學 六五、四三三 (十二歳ヨリ)	五二、六八八	五、七
中學程度 二、五二、九五五 (十五歳ヨリ)	一、三〇、〇九八	一、六、四
高等程度 二、〇九、四五五 (廿歳ヨリ)	一、八三、三二二	一、七

依是觀之明治四十四年度に於ける教育普及は實に尋常小學校に於て九割八分九厘高等小學校に於て三割五分七厘中學校程度に於て壹割六分高等程度に於て實に二分七厘に過ぎず彼の悲觀論者か普及せりと云ひ得るは僅に小學校に於て云ふを得るの言にして高等教育を以て普及せり

稱へて就職難の原因に爲さんとするか如きは杜撰も亦甚たしきものと云はざるべからず
第二に論して曰く毎年卒業すべき多數の學生は之を收容すべき餘地を存せずと然れ其後節に於て説明するか如く其收容し能はざる所のものは甚た少部分にして其餘地尙存在するものあるを見る此に於てか吾輩は想ふ現代の識者漠然僅に其一面を見て以て直に全般を推斷したるにあらざるか悲觀論は到底其不完全たるを免る能はず

然らば翻て樂觀論は果して完全無缺と云ふべきか即ち一、毎年多數の卒業生を出すも社會の進歩と共に就職方面の擴張増加も亦大なるを以て就職に苦む事あるべからず二、高等遊民は智職の水平線を高め學界の保護者となり文化の重鎮となりて社會の向上を來す

第一説は後述するか如く大部分は眞實なるか如し然りと雖も之を以て全般を推斷し恰も就職

難の如きは絶無の如く見做し又存在するも顧みるに足らざるものとなすか如きは實に社會に迂遠なる論と云はざるべからず而も第二の説に至り高等遊民は學界の保護者となるとの言は凡ての條件の満足ありて初めて爲すを得るものにして智識の進歩は必ずしも道德の進歩を來すと斷言する能はず今一步を譲り智識の進歩は道德の進歩と正比例を以て進むものなりとするも智識の進歩は經濟上に於て満足を與ふるものなりや此點に於て學者少しも顧みる所無し而も其甚たしきに至りては「人物の眞の淘汰眞の競争は數多き中に以て行はる可く今日の我國は高等教育ある青年子弟を以て肩摩蹙擊せらる可き其間にありてこそ眞の人物を生産する事を得可けん就職難の聲は只其犠牲者の讒言のみ何等恐るるを須ひんや」と之れ餘りに現代の切迫せる社會狀態の眞相を冷眼視し奮闘場裡に苦哀しつゝある青年に同情なき高見の見物に非ざるなきか而も

彼等自ら取扱へる青年か如何なる煩悶を懷て學問と實社會との間に懊惱しつゝあるかを知らずして尙且樂觀に付せんとす之れ同情なき淺慮たるを免れざるなり

夫れ悲觀的識者樂觀的學者共に時局の切迫に對して論究するや大に宜し雖然共に其利弊一面のみを見て其極端に走る而も輕々に此問題を即斷せんとす現代學者識者の間合せなるに驚くと共に本問題の如何に解決に困難なるかを推知せしむるものなり此に於てか吾輩嘗に自家眼下の片面に没頭する所なく青年の立脚點より大に其根源に溯り批判論究せんと欲するものなり

第三節 各種高等程度學校卒業生の就職狀態

抑も吾國の高等教育は其普及僅に二分七厘に過ぎざるに早くも就職難あり其教育の弊に苦しむの狀況にあるは現實にして文明の價値果して何所にあるやを疑はしむ果して然らば今の吾國

最高學府たる高等諸學校は此の時代か要求する所の科學の研鑽と人材の養成とに遺憾なきか又社會は果して此等人物の要求を爲しつゝあるや此の需要供給の實況を研むるに及て余輩今日の學校に於て其間に非常なる不調和の存するを見此の不調和こそ現代識者學者をして自吾墮着に走らしめたる所而て卒業生の就職難を惹起せしめたる所なくんはあらず然らば此需給の關係果して如何

我國現今にありては醫學生高等工業學生高等農業學生等に於ては未だ其就職難は發生を見ざる所なるのみならず工業學生に至りては其需要の多大なる遙に供給を超過する所なるは各學校

年 次	教員 官吏	銀行 會社員	自家 營業	留學研 究兵役	未 明	合 計	卒業生百人ニ 對スル未明者
明治四十二年	一二	七三	一七	七九	一二七	三二〇	四〇、九
同 四十三年	九	七一	八	五九	一四一	二九〇	四九、一
同 四十四年	二〇	一〇一	二二	五九	一四四	三五三	四一、二

年報に依りて熟知する所なる可し此の方面にありては就職難は殆ど皆無と云ふを得可きものにして樂觀して可なり然りと雖も翻て高等商業學法律政治學に至りては其就職狀態大に寒心す可きものあり次下少しく統計上より述べん
其一、高等商業學生の就職狀況
社會は人材を要し學校は人材を供給し青年亦以上の覺悟を有す然るに何事ぞ實際を見るに高等商業學校卒業生たる者續々として其就職に苦みつゝ煩悶の淵に放浪するを見んとは今東京高等商業卒業生就職狀況を見よ即ち左の如し(明治四十五年文部省年報一九三頁)

依之觀是は其卒業生の約半數は年々未就職者なり最も優良と稱へらるゝ東京高商にして既に然り況んや他校に於てをや

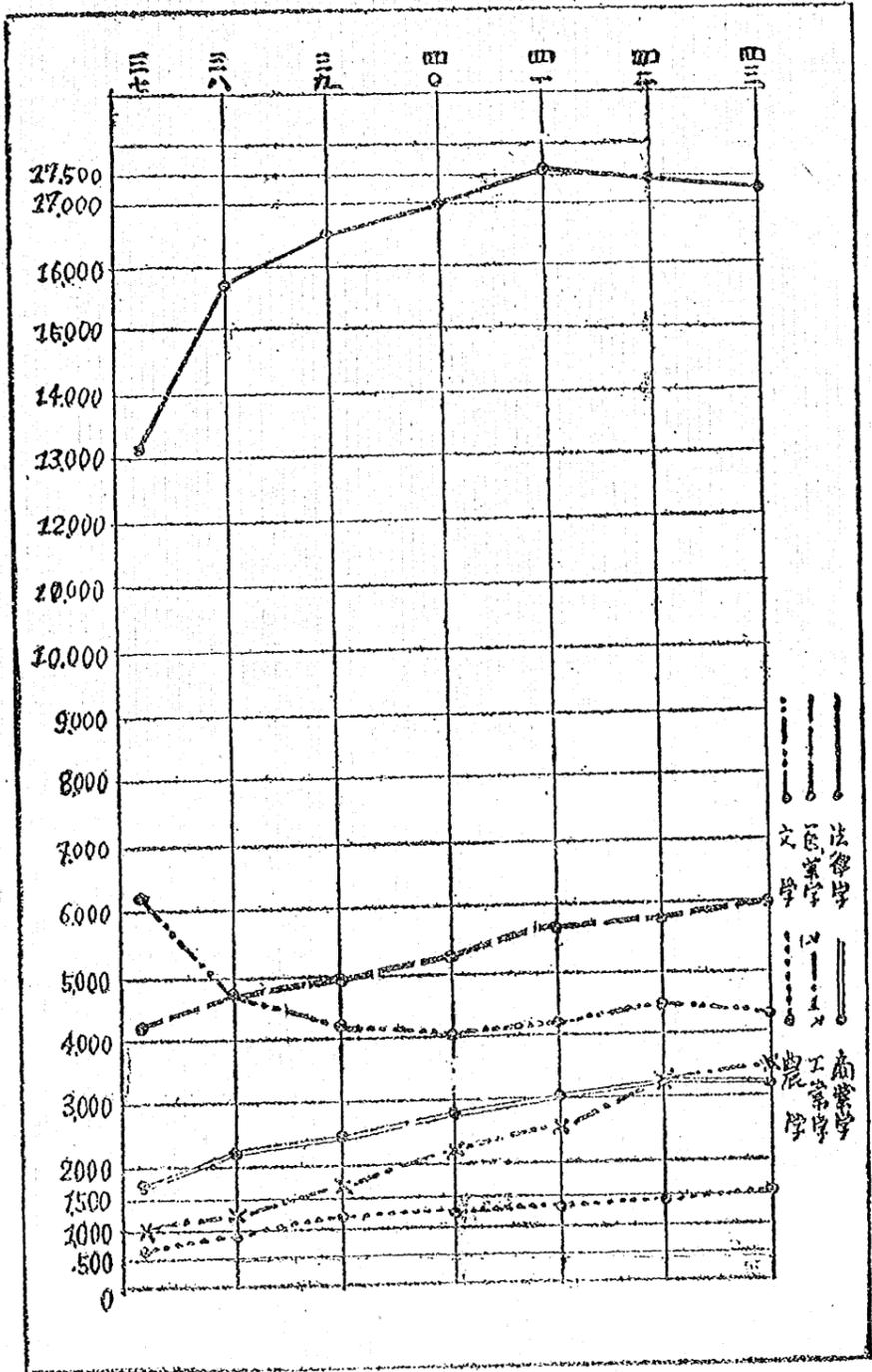
政治法律學生の就職狀況

抑も吾國たる維新當時に於ける政務改革の爲に多數の官吏を要求せしも其供給甚た少なかりしを以て政府自ら學校を設立し官吏養成の途を開けり當時官尊民卑の舊弊深く人心を支配したる時に際し昨日までは白面の一書生今日は既に官途に就き權勢赫々意氣大に揚り其恩遇に浴しては出世と榮華とを壇にす此に於てか全國人心翕然として斯學に向て集中す然りと雖も此種の官吏需要は畢竟一時過渡時代の現象にして新秩序の定まると同時に早くも終を告げたるなり

然るに社會人心は過去時代の惰力に驅けられて斯學に向ふの青年年と共に増加し他學科と甚たしき不調和を示すに至れり即ち次表(次頁)に依るも如何に其不調和と斯學々生の増加とを一瞥するを得可し

見る可し吾國の法律政治學生の多大にして而も其増加の激甚たるを現在の趨勢實に斯くの如し其普及の點は大に宜しと雖も翻て其増加數に伴ふて官吏の増員を許す可きか年々世に出つる法學生果して青雲の志を得て官吏たり得る者幾何更に官吏以外に於て法律を活用して社會に獨立的職業を營み得る者果して幾何ありや吾輩此點を思ふ時實に一片の不安と憂慮なきを得ざるなり

大學校各種高等專門學校生徒累年比較 (四十年報第三表)



左の法律學生の就職狀況を一覽せよ

年次	列檢事試驗 出願者	及第者	辯護士登用試驗 出願者	及第者
明治廿一年	六四六	八一	六八五	八五
同 廿二年	八〇〇	五一	九八二	三二
同 廿三年	七七六	七六	一〇〇二	四六
同 廿四年	一〇六九	八〇	一〇〇二	六二
同 廿五年	一〇九四	一三八	一一一〇	八一
同 廿六年	一、一四三	八〇	一二六九	三六
同 廿七年	一、一四五	一四六	八五〇	三九
同 廿八年	九〇〇	三九	六二九	一四
同 廿九年	一、一〇六	五五	四〇一	一四
同 卅十年	一、二四七	六八	三八三	一三
同 卅一年	一、一六四	七二	四七一	一二
同 卅二年	一、五七二	九二八	八九九	四七三
同 卅三年	一、一六四	七七	七四七	三九
總數	一一、五七二	九二八	八九九	四七三
壹年平均	九六四	七七	七四七	三九

則ち知る其出願者の九割は失格者となりて其合格者たる者十ヶ年平均八歩にすぎず之に亦外交官高等文官試験合格者を加ふるも毎年二百名内外なり現在の需要如斯し然るに翻て其供給の方面を見よ毎年法律政治學を修めて世に出づる者は左の如し (各年度統計年鑑)

明治廿七年 一、二二七 明治四十年 二、四八五

第八卷 (九〇一) 雜 錄 就職難論

第七號 一一一

同 卅八年 一、六六一 同 四十二年 三、八七九
 同 卅九年 一、九七一 同 四十三年 二、三三八

依是觀之毎年平均二千人の法學生を供給し其志を得る者多くとも二百人を出す供給の超過正に倍に當る

茲に於てか是等余剩人員たるや身に高等教育を受け乍ら職を得る能はず閑居して不善を爲す

可き傾向を有する高等遊民となりて社會を毒せんとす識者の悲觀説を稱ふ亦無理なき所なり而も彼等にして官途を斷念し茲に第二の職を選択するの己むなきに至るや醫師技師たる能はず下級店員等は屈辱として忌避す況んや多少身を勞するか如きものに至ては絶對に欲せざる所此に於てか行政的業務に準する會社銀行に向て滔々として集中す就職難の起る之れ當然なり而も惹て商業學生に影響を及し商業教育を受けたる有用人材にして其慘害の餘波を蒙り亦就職難に陥らしむ法律學の普及は終に如斯き嘆す可き結果を齎らす寒心せざるを得んや然らば此の如き現況に馴致したる根本的原因に至つては果して何處に發生したるか更に次節に詳述せん

第四節 就職難の根本的原因

其一 財政の悪策と實業界の不振

就職難の根本的原因是複雑にして種々ありと雖も斯く卒業生か官吏以外に於て其就職し能は

ざるは就職す可き業務の不振に歸せざる可からす即ち其根本たる吾國財政の悪策に因るものと云ふ可し

抑も我國財政難たるや必ずしも今日に始まる問題にわらずと雖も今や政府自ら財政問題の處理するに於てすら歲計は不足を告げつゝあるは掩ふ可からず蓋し吾國の財政をして今日の如き困難に陥らしめたるは政府自ら政策を誤り日露戰爭後整理す可き非常的財政緊縮を怠りたるのみならず無謀なる積極政策を採り一氣呵成に幾多の新事業を起したる結果過大なる歳出入膨脹となり民力に伴はざるの増税を斷行し國力に副はざる公債を濫發し民業を顧慮せざるの獨占官業を敢行し一般財界をして今日の慘狀に沈淪せしめたるにあり試に見よ戰前二億二千萬圓の經常歳入は戰後の初年に於て正に倍に達す公債に至つては戰前五億二千萬圓のもの戰後一躍二十五億に達し僅々二ヶ年にして約五倍の巨額に

達す更に吾國外國貿易は年々輸入超過千萬乃至六千萬圓に達す財政の前途寒心に耐へざるものあると同時に又人民の負擔の過重、事業の不振等推知せしむるものあり更に翻て官業の民業に及す壓迫に至りては蓋し驚く可きものあり其利

廿八年

四十三年

官業資本

二七、九四〇、二〇九圓

九一八、六一二、四一八圓

八九二、六七二、二〇九

七五、三

民業資本

九七五、八三六、五五五

一、三六七、一六四、二〇四

二九一、三二八、六四九

二四、七

差引増加額

増加割金

見る可し吾國僅に五年間に於ける官業資本の増加は全體の七割五分民業資本は僅に二割四歩に過ぎず如斯くして進まんか官業の跋扈は終に民業を蠶蝕し只々不利冒險的産業のみ民業に残し市況の不振を來すのみならず民業の活動範圍をして益々狭少ならしむ

然らば論者或は云はん民業の縮少は官業の擴張を來す從て民間の就職難は官途に於て就職易を生ず官業の擴張尙就職難の原因たるものならんやと然り官業か民業の範圍外に於て増加擴張

益多きものと見るや直に民業を奪て國有とし獨占して多大の利益を收む而も自由競争を禁し改良進歩を害するのみならず人民の精神をして萎縮せしむるもの少なからず試に其資本増加額を比較せよ(三十回統計年鑑三三〇、三四九頁)

を來すに於ては或は官吏の新需要を生ずる事ある可し雖然現今の如く民業を奪ひて官業となすは單に人材の需要を増さざるのみならず社會に及す悪影響に至ては決して尠少にあらず試に思へ今の一官業をして民間に移し自由競争場裡にあらしめば多數の大會社の勃興を促し其生産品の低廉は市況を活躍せしむるのみならず其就業人員の一大増員を見るや疑なし

要之るに今の就職難の根本的原因たる經濟界の沈淪即財政々策の無方針に歸す可きものなり

果して然らば我政府の宜しく採らざる可からざる手段方法如何之れ固より一ならずと雖も要するに民力休養市況恢復途を講ず可きものなり整理可なり官業縮少可なり免稅減稅可なり苟も勇斷果決其根本的整理を斷行せんか七億に近き歲計中一億内外の經費節減する事豈至難なりとせんや

其二、人材の中央集中

地方人士の都市集中は必すしも近世文明の特色にわらず古代に於て早くも此現象の存在せしは歴史に顯著なる所なりとは雖も如斯き趨勢が最も一般的となり又最も繼續的となれる事未だ今日の如きはあらざるなり今試に東京に於ける人口増加を見よ

	本籍人口	現住人口
明治十一年	六七一、三三五	八一三、四〇〇
同 廿一年	七八三、二八六	一一二九八、六六一

競争は滔々として都市に漲り凡ての社會問題を激成して就職難を來さしむ之れ當然のみ

纏て高等程度の學校卒業生は毎年八千人を數ふ其一部は歸郷して祖父の事業を繼承する者あり可し或は有資者は新企業に運命を開拓する者あり可し雖然笈を負ふて東都に遊學せし者後述する如く到底歸郷して祖父の業を繼ぐ能はざるに至る而も偶々有資者ありとするも學校卒業後直に之を利用運轉して獨立の新企業を開くには餘りに實社會に無經驗也此に於てか遊學青年たる者皆都市に止て就職せんと努む此の結果人口集中に苦しむ上更に人材の集中を來し給料は益々低落を來し就職難の愈々激烈なるに至る實に就職難は都市の特産物にして人材集中の過度なるに因る而も彼等青年尙愛郷の念なくして都市に戀々たる者は果して何に因るか之れ實に社會人心か過去の迷夢に支配せられたる舊弊に存する所更に改めて解かん

同 卅一年	八九九、三二二	一、四二五、三六六
同 四十二年	一、二三九、〇二九	二、一八六、〇七九

以て人口か本籍に於て二倍現住に於て三倍せるを見る市民の逐年驚く可き速度を以て縦横に膨脹するを見ると同時に又如何に其密度の高きかを見る可し(統計集誌三七七號)

主府	一英哩ノ人口	主府	一英哩ニ付人口
巴里	一四二	倫敦	六〇
伯林	一三〇	維納	三八
東京	一一五	紐育	二〇

則ち知る東京は世界第三位の密度を有す倫敦紐育の如き一見雜踏の都東京市の如き到底比肩する能はざる如し而も其最高密度の部分と比較するに「サウスウオーク」の百八十三人「マンハッタン」の百四十九人等實に驚く可きものありとは云へ之を淺草區の二百五十人に比較すれば格段の相違あり

人口の集中既に如斯し豈平穩安靜の生活を感亂せしむるものなきを得んや果然酷烈なる生存

其三、歴史的舊弊と地方人士の虚榮

維新後に於ける書生の僥倖は既に述べたり此の僥倖こそ社會の情勢を一變し昨日までは放棄せられたる學問今日は既に觀迎せられ人心は一種病的なる學問狂となれり則ち彼等得意と榮達とは只々學問ありしか爲なりと簡單に認定し子弟は如何にもして學問せんと希望し父兄は無理にも學問の修業を爲さしめんと努力す固より人情にして敢て不可なりと云はず雖然も此の風習こそ學問は其蘊奥を研むるが爲の習學にあらずして單に官職を買ふべき商品卒業免狀は重地位を得べき小切手なりと誤解せしむるに至る

其四、學校卒業生の無能

吾輩最後に就職論の原因として數へんと欲する所のものは卒業生の社會に於ける迂遠なる事あなり則ち多くの費用を没し多くの年月を費し高尚の學問をなしたる割合には其卒業後の數年間には社會人心か斯待せし程敏腕にあらざるは確

かに就職難の一因たらずんばあらず然り之等卒業生に對する社會の非難を聞け學生は餘りに理窟を喋々するのみにして實務に迂遠なりと云ふ者修學年限の餘りに長くして半老生を作れりと云ふ者其他或は學制を攻撃し試験制度を非難する者滔々として數ふへからず而して學生たる者又此の弊害を熟知し一刻も早く免れん事を欲して止まざるなり

雖然識者學者にして學校卒業生の迂遠を責め教師の沒常識を難する者果して此の責を全く免れ得たりと信するか見よ彼の修學年限長きを非難する者必すしも年限を無視する者に非す却て此年限長き卒業生程之を優遇し俸給は勿論昇級の條件ともなす實に年限の長短は其境遇に優劣を定むべき標準となしつゝあるに非すや而も學制教師を非難し卒業生の迂遠を攻撃する者却て此の弊害を助長すべき手段を探りつゝあるに非すや吾輩卒業生の迂遠か就職難を醸すの原因

たるは認むるも此の迂遠無能の依て來る所を見るに決して學生の責に非す學制の缺點にあらず社會人心の滔々たる誤謬に發因す
試に思へ現代の試験制度たるや益裁的にして只々教師の講義を暗誦したるや否やを見て直に學生の人格才能の全般を批判すべき標準となす而も社會人心は此の學校の附せる席次を以て絶好無二の標準と爲し新聞紙は先づ其首席卒業者を紹介し而も人格品性悉く賞讃して止まず世人亦之を崇拜尊敬す是れ人情にして決して惡きに非す雖然學生の迂遠無能を罵り試験制度の弊害を極論する學者識者にして先づ其卒業生を採用せんとする時此の學校當局者の附せる席次を以て尤も重しとなして診索す口に試験の弊學生の迂遠を稱へながら其際に臨むや試験萬能を獎勵す實に自家撞着も亦甚たしと云はざるべからず
論して此に至り吾輩言を識者學者に寄するに

學生の迂遠を罵る前立つ自己の態度を省み試験萬能の舊弊を打破し茲に自家撞着の言論を改められん事を囑望するもの也

第五節 結論

吾か高等遊民問題即ち人材壅塞は天下の人心漸く寒心せしむるものあり固より吾國は特種の國體にして社會主義の影響を受けざるは確信する所なりとは云へ國運の前途を企劃し國民青年を指導せんとする者の腦裡には必ずや此問題に對し應すべき準備解決なくんばあらず而も社會問題多々ある中經世家の經輪學者の指導により歲月の久しきに斯すべきものあれども殊に吾國當面の急務たる人材壅塞問題に付て之を如何に指導解決すべきやは決して閑人の閑語に非なり淺學非才敢て此舉をなし學者識者に反對して獨想を披攤したる所のは本問題を提供し諸君の高讀を得余の微意徒然に終らざるものあらんか余即ち草莽の野に在て泣かん

批評と紹介

カナン氏著『富』

千九百十四年倫敦發行
四六版 本文 二七四頁

本書は彼の有名なる英國派經濟學史 A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848 の著者にして現に倫敦經濟學校に於て教鞭を執りつゝある Edwin Cannan 氏の著述に係り其書の原名を Wealth, a Brief Explanation of the Causes of Economic Welfare とす。本書の目的は専門的に經濟學を研究せざる者に對して斯學に關する一般的知識を與ふるにあるが如し。されば著者は學理の科學的説明又は歴史的發展に重きを置かずして、普通の經濟學教科